

いやなんだから、やめて！

りえこ

まーちゃんが こいのいけのばしょに いくとき、

りえこも ついていった。

そしたら、二ねんせいのが まーちゃんにむかって ボールをなげて、

まーちゃんは びっくりしていた。

たぶん まーちゃんは こころのなかで いやだったとおもっ。

まーちゃんのかおが いやそうなかおを していたから、

りえこは 二ねんせい、

「やめて」

と いった。

二ねんせい、へいきなかおで りえこにむかって、

「バーカ」

と いった。

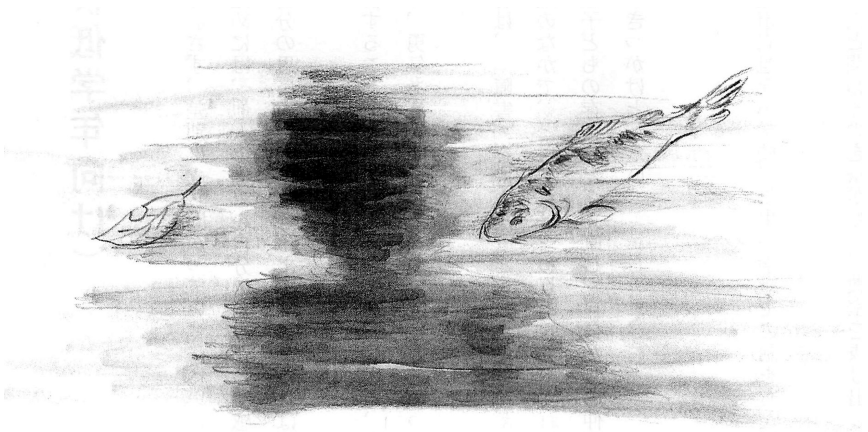
そして、まーちゃんが にげていくのを見て、

りえこは まーちゃんを おいかけていった。

いつもなら まーちゃんは、

こいのところにいて わらうの、

そのひは あまりわらわなかった。



いやなんだから、やめてー！(小学校低学年向け)

A 教材設定の意図

「障害」児がいる学校では、常に「障害」児の存在そのものが、子ども達に問題を投げかけてくれる。学校のなかで「障害」を持つ子と日常的に関わっていない他学級・他学年の子どもが、「障害」児に対して偏見を持ち、からかったり、いじめたりすることは起こりうる。「障害」を持った子は自立し、弱みから、いじめの標的にされやすい。

仲間であるならば、その際、どのように行動したらよいのか。

りえこさんは、まーちゃん(以後、優徳さん)を「自分たちとは違う」と見るのではなく、自分たちと同じように気持ちを持ち、バカにされれば腹が立つ仲間として見ている。

そして、優徳さんの心を踏みにじるものから優徳さんの心を守り、優徳さんの人間性を守った。また、人間の尊厳を侵す者に抗議することによって、自らの人間としての尊厳を守った。

仲間とは、お互いの気持ちを分かち合い、お互いに人間の尊厳を守り合う人と人とのことである。あらゆる差別を許さず、差別に立ち向かっていくたくましい子どもを育てるためには、他人の痛みを自分の痛みとして感じるだけでなく、自分の思いを行動に移せるようにしなければならぬ。

この教材を学習することによって、不当な差別を見抜き、それらと闘っていく、勇気ある人間として育って欲しいと願って設定した。

なお、こめ教材は、「障害」を持った子どもを考慮するだけでなく、学級のなかで、ともすればまわりから見下された見方をされがちな子どもも存在をとらえ直し、自分たちの仲間、づくりを考え直すきっかけとした。

B 教材の解説

本教材は、松任市立旭丘小学校三年生の学級での話をもとにしている。

優徳さんは、「人と関わるのを嫌がり」、教室を抜け出していくことも多かった。お母さんは、「大人じゃないと自分のことをわかってもらえない、要求を聞き入れてもらえない」と、優徳さんのことを言っていた。

その優徳さんが、三年生になってから、りえこさんをはじめ、まわりの子ども達に信頼を寄せられるようになり、教室を抜け出さなくなっただけでなく、友だちといっしょに校庭から教室へ戻ったりするようになった。ついで、友だちといっしょのことをするようになった。リレー、五メートル走、走り幅跳び、鉄棒の前回り下り、ドミノ立て……。そうすると、それまで熱中していたおしゃべりパソコンなどの一人遊びをしなくなった。教室でも、友だちの筆記に興味を持ち、漢字を書いて覚えたり、計算をしたりするようになった。さらに、友だちに物の名前を自分から語りかけるようになった。

人と関わりたがらなかった優徳さんが進んで人に働きかけるようになり、言葉が少なかった優徳さんがたくさんの言葉を発するようになったのである。

優徳さんがこのような成長をしていくなか、ある日の朝の会で、子どもたちから、高学年の子がおもしろがって優徳さんを追いかけてまわすので、腹が立つという話が出される。でも、子どもたちはその場で、高学年の子に対して何もできなかった。

そのとき担任は、「そのとき感じた怒りを力にして、誰に対しても、おかしいことはおかしいと言

えるようになったらいいね」と、一言だけ伝えて朝の会を終えた。

この担任の言葉を聞いたりえこさんは、優徳さんをバカにする高学年の子に何も言えなかった自分を振り返った。教材文の出来事は、その日の二限後の休み時間に起こったことなのである。

一年生の子が優徳さんにボールを投げていじめているのをやめさせたりえこさんは、その後、教室に戻ってから友だちに話し、担任に話した。それから、担任や優徳さんらといっしょに、各前の分らない(ネムフレート)の色で学年は分かる)その子を探しに、一年生の教室に行った。優徳さんに向かつてボールを投げてきた子が見つかった後のことを、担任は次のように書いている。

ほくはこの子に、「優徳、ちよつとみんなと違うところあるかもしれないけど、あなたと同じように気持ちあるんや。嫌なことされたら嫌なんや。だから、ちゃんと優徳に謝って欲しいんや」と伝えた。その子が謝るのを、優徳はじっと見ていた。

また、りえこさんは、そのときの感想を、教材文の後に次のように綴っている。なお、文中の「のんちゃん」は、優徳さんの双子の妹の望木さんのことである。

なんでまーちゃんとかのんちゃんとかがしょうがいをもっているからってにらんだり、ボールをなげたりするのかなと思った。
りえこはまーちゃんといっしょなくみになってよかったと思う。りえこは「ねん」のときに、のんちゃんのことをへんな人だと思っていた。でも、がっきになっていっしょにあそぶようになった。もしまーちゃんか、のんちゃんがいじめられたりしているときは、とつえの人でもゆづきをもってやめてあげんなんよというようにするよ。まーちゃんとあそんどつたらたのしいからこれからまーちゃんがいじめられとつたらたすけるよ。

実は、りえこさんは二年生のときまで、「家にお客さんが来ると、慌て陰に隠れてしまつほど自分をさせなかつた」子だった。そのりえこさんが、たとえ年上の人であっても勇気を出してとめるよと言つて、優徳さんを助けるという。まさに自らの人間としての尊厳を守る行為であるといえる。

C 指導上の留意点

「障害」児のいる学級では、この教材を扱つことによつて、今一度自分達の学級を見つめ直し、それまで気づかなかつた問題の掘り起こしを欲しい。

「障害」児がいる・いないにかかわらず、これまでの学級づくりのなかで、子どもたちの関係をしっかりとつかんでおいてほしい。まわりからかわれたことのある子を、何人か前もって知つておくこと。

D 参考資料

- ・「つながり合ひともに生きる」(徳田茂・野田龍二編著、つげ書房新社)所収
- ・「いっしょに生きて、ともに育ちあふ」(中田省己)松任市立旭丘小学校
- ・挿し絵 松崎厚(金沢市立野田中学校)

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	児童の活動・指導の留意点
<p>一 導入</p> <p>① 題名について考えてみましょう。どんなお話だと思いますか。</p> <p>二 展開</p> <p>② 今から、りえこさんという子の書いた作文を見せます。先生が読むので、聞きましよう。</p> <p>③ りえこさんは何が「いや」だったのでしょうか。</p> <p>④ 二年生の子が、まーちゃんに向かってボールを投げたのはどうしてでしょう。</p> <p>⑤ りえこさんはなぜ、二年生の子に「やめて」といったのでしょうか。</p> <p>⑥ りえこさんは、二年生の子をどう思っていますか。</p> <p>⑦ このあと、みなさんだったらどうしますか。</p> <p>三 まとめ</p> <p>⑦ 自分達のクラスにも、まーちゃんのような友だちがい ないか考えて見ましよう。</p>	<p>① 本文を見せずに、題名のみ板書し、想像を膨らませたい。そのなかで、他の人と違うことや、同じことができないという理由で、嫌なことをされてからかわれることが、身のまわりによくあることに気づかせる。</p> <p>③ 自分のことではないのに、優徳さんの心の痛みを自分の痛みとして感じ、「いや」と言ったことをおさえる。</p> <p>④ 優徳さんが「びつくりしていた」様子と照らし合わせて発表させる。</p> <p>⑤ 友だちである優徳さんを守るため、勇気を出して、優徳さんに代わって抗議したことを認識させる。</p> <p>⑥ 「へいきなかおでりえこに『バーカ』といつてきた」というところに、不快感が表れていることをおさえる。</p> <p>⑦ 子どもたち自身の言葉で語らせ、「教材の解説」を参考に補足する。</p> <p>⑧ あらかじめ、「気になる」子の発言を意図的に取り上げて展開することも考えておきたい。子どもたちの思いをつなげていく視点で、以後の授業につなげていく。</p>